関連ページ『社会科 中学生の歴史』p.214～215

感染症と私たち
――20世紀のインフルエンザ

日本女子大学 名誉教授　**成田 龍一**

人類と感染症

2019年に、中国で確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が、世界中に感染拡大している。現在までのところ、世界での感染者は、累計で約４億8500万人（死者　約613万3000人）、日本では約645万人（死者　約２万7900人）を数えている（いずれも、2022年３月30日現在、ジョンズ・ホプキンス大学の調査による　https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/）。

新型コロナウイルス感染症は、急性感染症であり、風邪のような症状をみせるが、重症化すると肺炎を引き起こし死亡するに至る。これまで知られていなかったウイルスによるものであり、またたくまに世界中に広がった。

人類はこれまで大きな感染症を経験してきている。古くはペストや天然痘から、近代に入ってからは19世紀のコレラ、20世紀のインフルエンザ、あるいは慢性感染症としての結核などである。そうした人類が歴史上に経験してきた、大規模な感染症の流行と恐怖のただなかに、現在の私たちも投げ込まれている。

感染症の流行は、社会の状況と切り離せない。たとえば、日本にコレラが大流行したはじまりは、1858年のこと。日本が開国し、外国との交流が活発となったときにコレラが大流行している。罹患するとあっというまに死んでしまうので「三日コロリ」といい、（コレラ菌の存在が知られていないため）虎の姿で描いたりして、恐れおののいた。

感染症は人びとの生命にかかわっているために、これまでの社会のあり方に大きな影響を及ぼす。新型コロナウイルス感染症で、ソーシャル・ディスタンスがいわれ、「三密」（密接・密集・密閉）が避けられ、オンラインでの会議が急速に広まったように、過去の感染症も、人間と人間の関係を変え、人間と社会の関係を変え、社会の仕組みを変えてきた。

第一次世界大戦・インフルエンザ・衛生対策

戦争は、大量の人びとの移動を伴うため、感染症が流行するきっかけとなることが多い。第一次世界大戦（1914～18年）中を含む1918年から21年まで、インフルエンザが世界的に大流行した。インフルエンザでの死者は5000万人ともいわれており、大戦で死亡した人びとの数を上回っている。当時は「スペイン風邪」といわれたが、はじまりはアメリカの兵士からヨーロッパに広がったこととともいわれている。日本でも「流行性感冒」とよばれ、植民地であった台湾で罹患者が見られ、日本本土にも拡大し、18年から21年に患者数約2380万4000人（死者　約38万8000人）を数えるに至っている（内務省衛生局『流行性感冒』1922年）。

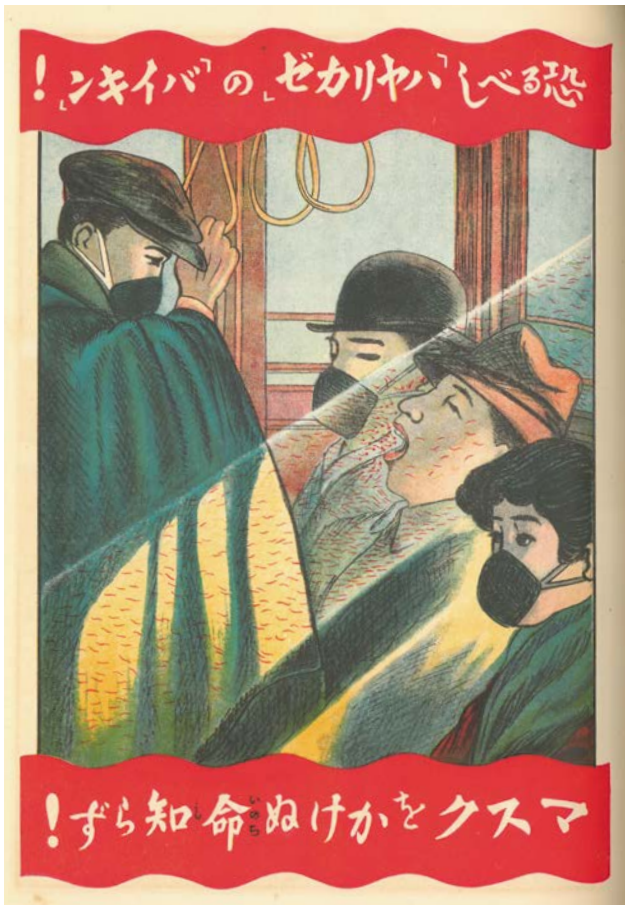
衛生行政を担当する内務省衛生局は、インフルエンザ対策にのりだす――病院や病床を増やすなどの施設面での対応とともに、人びとに対する注意喚起にも力を入れる。ポスターをつくり、マスク着用とうがいによる予防を呼び掛け（右頁①・③）、予防注射と日光消毒を伝達する（同④）。飛沫による感染であることをいい、したがって、人込みを避け、飛沫を防ぐようにいうのである。（咳をする人に）「近寄るな」・（他の為にも　身の為にも）「鼻口を覆え」との標語もビラとして配布した。

かつて19世紀半ばのコレラの流行のときには、コレラへの対策が主流で、患者の隔離と消毒が中心的に行われた。人びとの側にも予防の意識がうすく、衛生の意識がなかなか浸透しない。コレラ患者を隔離しようとした医師や役人に対し、力づくで抵抗することもあった。

これに対し、20世紀前半のインフルエンザでは、人びとの側に衛生意識――予防の重要性が認識されている。ここには、いまひとつの感染症である結核が、大きく作用している。結核は、慢性感染症であり、ゆっくりと病状が進行するため、いつどこで感染したかが不明である。そのため、人びとは衛生意識を有していった。

そのことを前提に内務省衛生局が人びとにあらためてその自覚を強くうながしたのである。このことは、日本社会の変化とも重なっている。第一次世界大戦に伴う「大戦景気」のなかで、人びとの農村から都市への移動が進み、都市化が進展していた。そのなかでの感染症は、人びとにあらたな衛生の作法として、マスク着用やうがいの実行をすすめた。

また、都市化の進展と平行するメディアの発達は、視覚に訴える伝達を洗練させる。カラー刷りのポスターは、人びとのなかに入り込んでいきやすかった。



①

②

③

④

〈４点とも、国立保健医療科学院図書館所蔵
内務省衛生局著『流行性感冒』1922年３月〉